# 都林泉名勝圖會

一
㑹

754
.M41
v.2

六角堂池之坊の瓶花ハ専慶坊より發りて専好法師中興し家ニ其妙を得て
山水幽谷ハ公縁の瓶中ニ含み四季折々の草木自在にして森羅を立花と云所謂
十九箇條の秘傳ありて海内都鄙遠近ニ門人多く毎歳七夕の日ハ一堂の手向
として門弟聚りて瓶花の精妙をあらはし昔ハ公侶 帝にも捧進あり 将家ハ立花を
献り来今ニ絶る事なし 二水記云池坊専順法師ハ立花のことにあらはれ連歌の達人なり 紀波集の作者に入し大永五年三月六日粟田青蓮院御門跡
侯ト花の御會の時十瓶を插すとし云 云 池坊家蔵の書ニ 後柏原院御宇大永
年中禁内の御青蓮院尊鎮親王御直筆の御文出世師法輪院ら下
されしとなれハ池坊二十六代専順法師なりと云
其文云 立文也

先刻ハ池房参 内殊救瓶事多々事候 叡感
甚しく存一段之満足に以来月々日々ニ参 内候
とて堅下事ゆるし候條参 勅書上候 指てよし
候也〻
八月十三日

法輪院とし

七夕
池坊立花
瓶花と二星にまゐるしゆく
天河のあまた瓶に百花なり池の坊
星の嫁入の調臺につく
千代道
天鳴

池坊華道秘傳十九箇條目録

七一色　松　櫻　竹　水仙　紅葉　杜若　菊　蓮

三箇胴　松　牡丹　三箇之前置　松　萬尓　蘐薹

三箇流枝　中段流支　左流支　請流支

段躑躅　二真　合真

小巻　傳受　已上　大巻　傳授　生花七種　水仙　牡丹　椿　蘇鐵　芭蕉　蓮　蘐薹

老葉集

池坊专順法師の許よりく連歌の後

書状のおくろ侭

霧ふきえ木葉ふちりぬ秋もかし　宗祇

建仁寺　五山の其箇之大和大路

四條の南にあり　建仁二年源頼家公栄西禪師を延く地を王城の東に施し大禪苑於営直真言止觀の二院を構へ官寺とん　已上元亨釋書

開祖栄西禪師　明庵と号次　備中吉備津の人其先ハ賀陽氏なりしく薩州刺史貞政の曽孫く薙髪し廿八歳の時仁安三年夏四月商船に乗じ瀛海ふ泛んく宋國明州界に着し嗣法を虚庵敞和尚に請く建久一年四月ふ帰朝し当寺成開さ建保三年七月五日寂ス　年七十五

佛殿　釈迦　弥陀　弥勒　土地堂　土御門院神牌　源頼朝の像　頼家像　實朝像を安ス

開山堂　額　華藏世界　開山栄西禪師像　脇士天童を安ス　土御門帝宸翰

方丈　正觀音を安ス　東福門院御寄附　大悟堂　禪堂をいふ　文殊菩薩を安ス

鎮守楽大明神祠　備中吉備津社の末祖　開山の両親を祀る所

無盡燈　禪居庵にあり摩利支天尊を安ス　本尊大鑑禪師の作土佛の像

赤松圓心塔　大龍庵にあり

○當山十景　清拙和尚の頌あり　慈視閣　方丈　望闕樓　山門　大悟堂　僧堂

群玉村　衆寮　入定塔　開山塔　楽神廟　鎮守　無盡燈　禪居庵

清水山　第五橋　鴨川水

○扁額　三世如来殿　佛殿　清凉軒　方丈　拈華堂　法堂

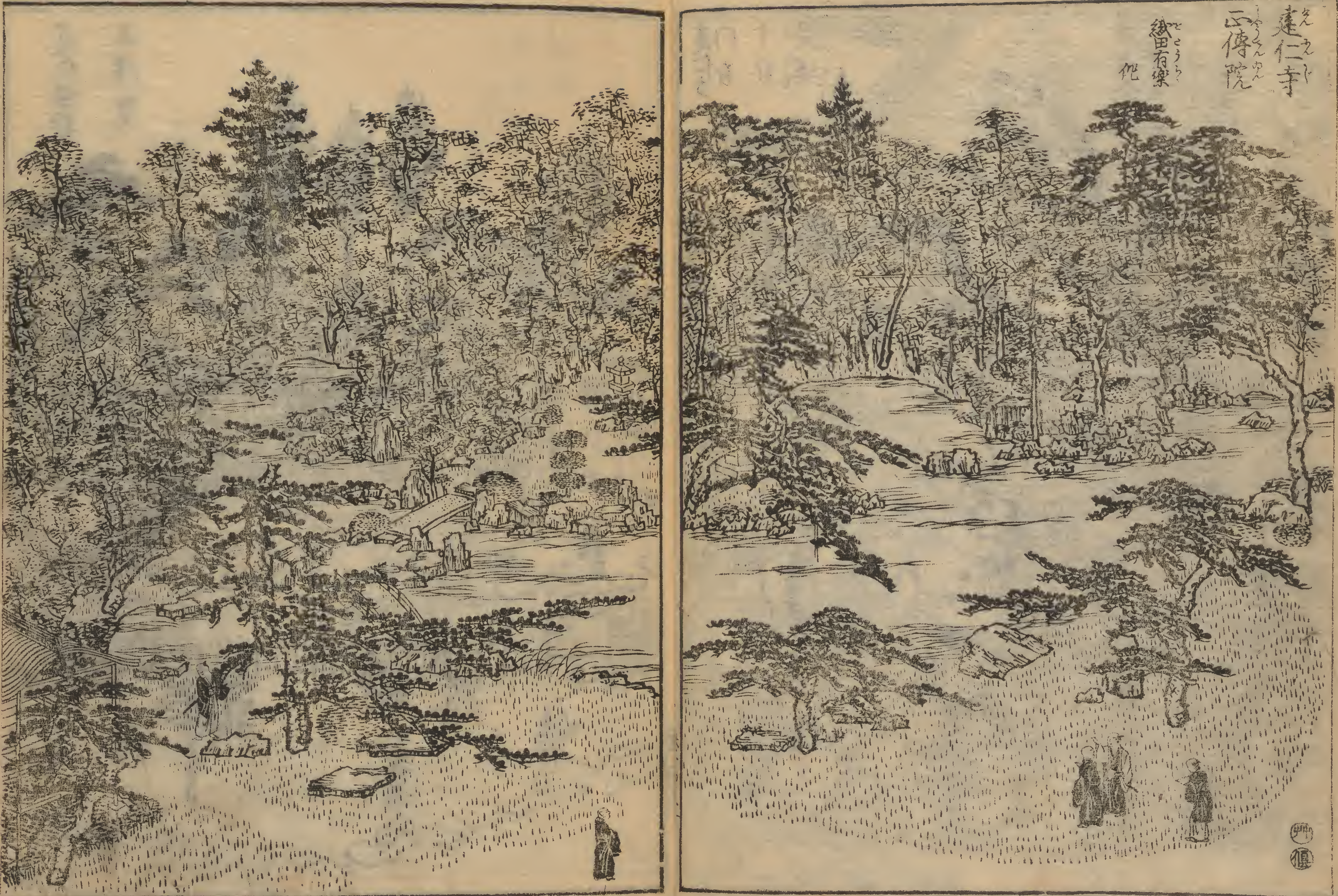
悦可　維那寮　首座　前板　夢升　後板　等慈　書記

龍藏　東藏　虎林　西藏　春會　知客　希眞　侍香

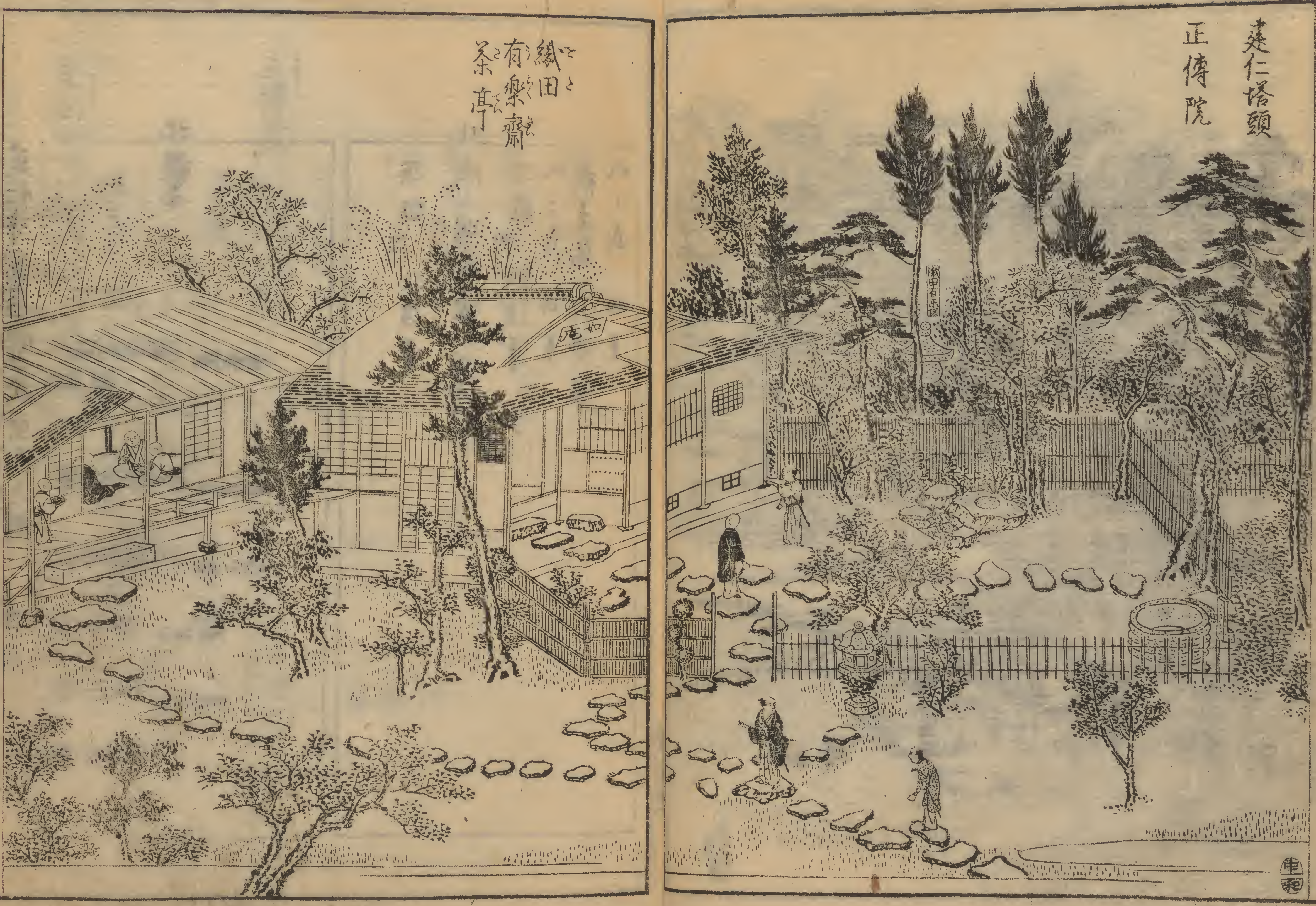
○蛭兒祠　門前にあり　例祭九月十六日祭礼巍々として　神楽一基あり

Bamboo & pine tied to torii for festivity

Curtains looped up


建仁寺
正傳院
織田有楽
佗

shape of balcony    Stones moving into porch



# 建仁寺畫墨曬掛虫干之圖

方丈

北

觀音

達磨像 顔輝筆 慶字賛

開山密庵 西澗 伊字九賛

開山密庵 西澗 亀山賛

仰山像 九峯賛

仰山像 古剣賛

顔宗像

北

猿猴 松 牧溪筆

開山明庵像 自賛

猿猴 松 牧溪筆

叭々鳥 同筆

觀音像 月壺筆

叭々鳥 同筆

藥山 接李翺 牧溪筆 為建仁方丈□

觀音像 月壺筆 宣徳[?]八月十八日謹画□

黄龍 接呂洞賓 牧溪筆 三軸共作之真相□

什寶數品あり繁きにより略之

○正傳院 十一世義翁和尚亀山院文和年中建其後慶長の頃織田河内守長益再興元和七年十二月十三日卒正傳院有樂如庵と号す

書院

中ノ間 蓮鷺 古法眼筆

西ノ間 唐ノ田猟

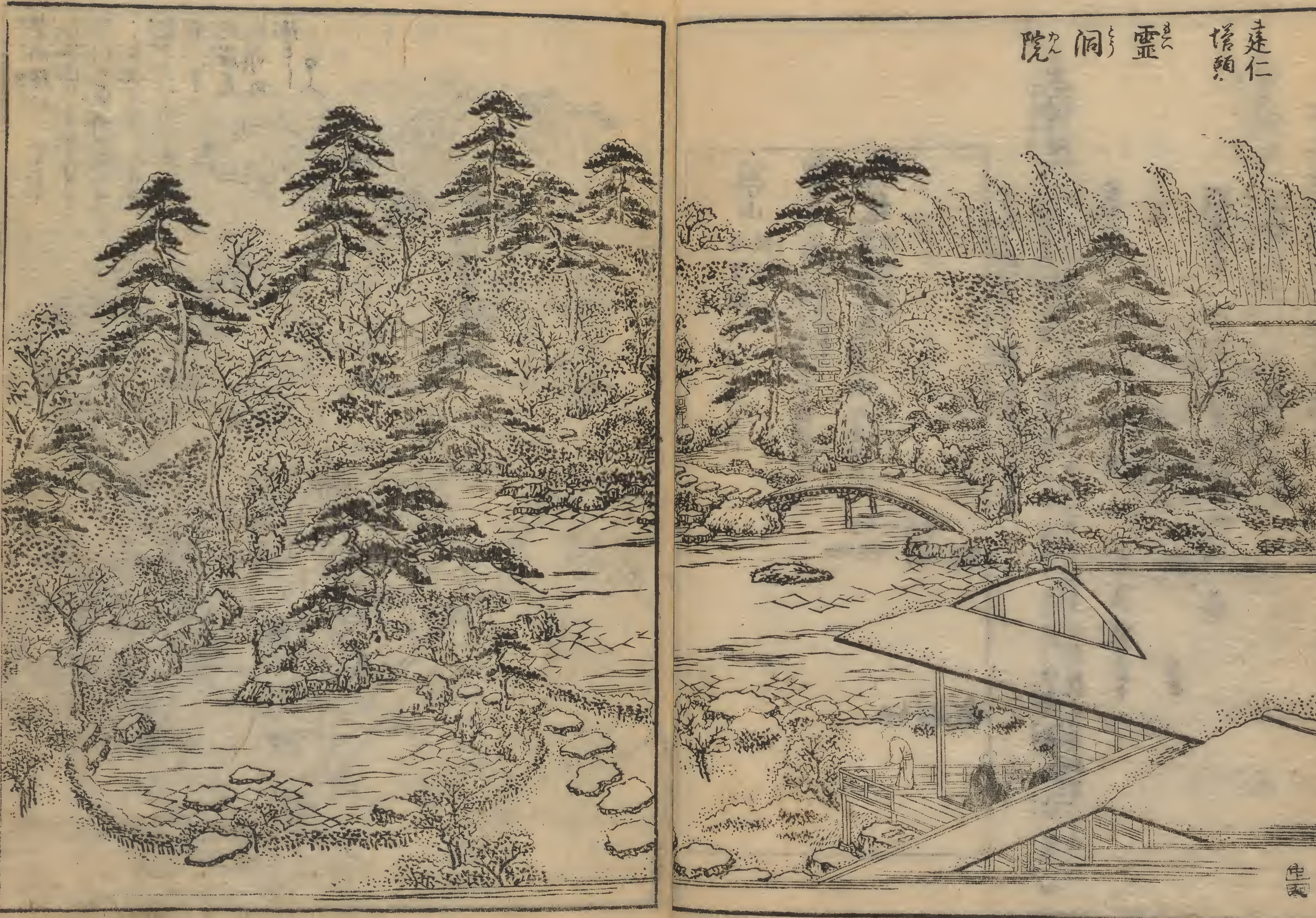
東ノ間 耕作

余間 山水 同筆

數寄屋 織田有樂の好 額如庵

○靈洞院 北六世為山和尚開基 後醍醐帝元應年中建立

其外塔頭林泉名画あり略之



建仁
塔頭

霊洞院

栄西禅師ハむかし
河原院の鬼瓦久しく
鴨川の深淵ニ沈ありし
を探てあまた人足に
夥く引上させ
建仁寺
陀羅尼
勤行の
瓦とし[illegible]

狂哥
引上る
栄西
禅師
首尾
の
瓦
頭ハ
おのづから
陀羅
尼の
徳みし
鬼あらはるゝ
[illegible]

九鯉

四條祇園橋とて昔ハ二條五條ニ等しく官橋也久寿元年二月廿九日橋造替
ありて供養の事百練抄ニみへたり又安貞二年七月廿日暴風霖雨の時洪水溢
漲して四条五条の橋流れ落る貞和五年六月十一日祇園執行行恵法師祇園
橋を済んとて本座新座の田楽を合せ老若群集め四条の東ニ桟敷を打せられけり
希代の群集して見物ス 太平記 異本
寶徳二年十月十八日四条の東橋成就して渡初あり 改暦雑記

茅根集 仁京四京橋もくもよめる
橋板も今わたる川にはらるゝ 都にいづれ方乃旅人 正徹

往昔ハ官橋もありしが洪水多く損じぬれバ後世仮橋となりゆきてとて次の東の廣
くして観物作貨食茶店多し特ニ六月半祇園の夕涼ニ美艶を粧ふ風姿の浪て
万燈水の流ニ輝きに東表の壮観なり天下の謳歌なるべし

四條橋
月照紅楼隠翠楊 徘徊倚檻夜如霜
蛾眉長袖青絲騎 箇箇寫成影也忙 楞亭

賀茂川の西岸ニ欄干を下しく
丈山の口が過たり夕すゞみ 蕪村

仁京納涼
涼しさや群集の中ニ入の月 定雅

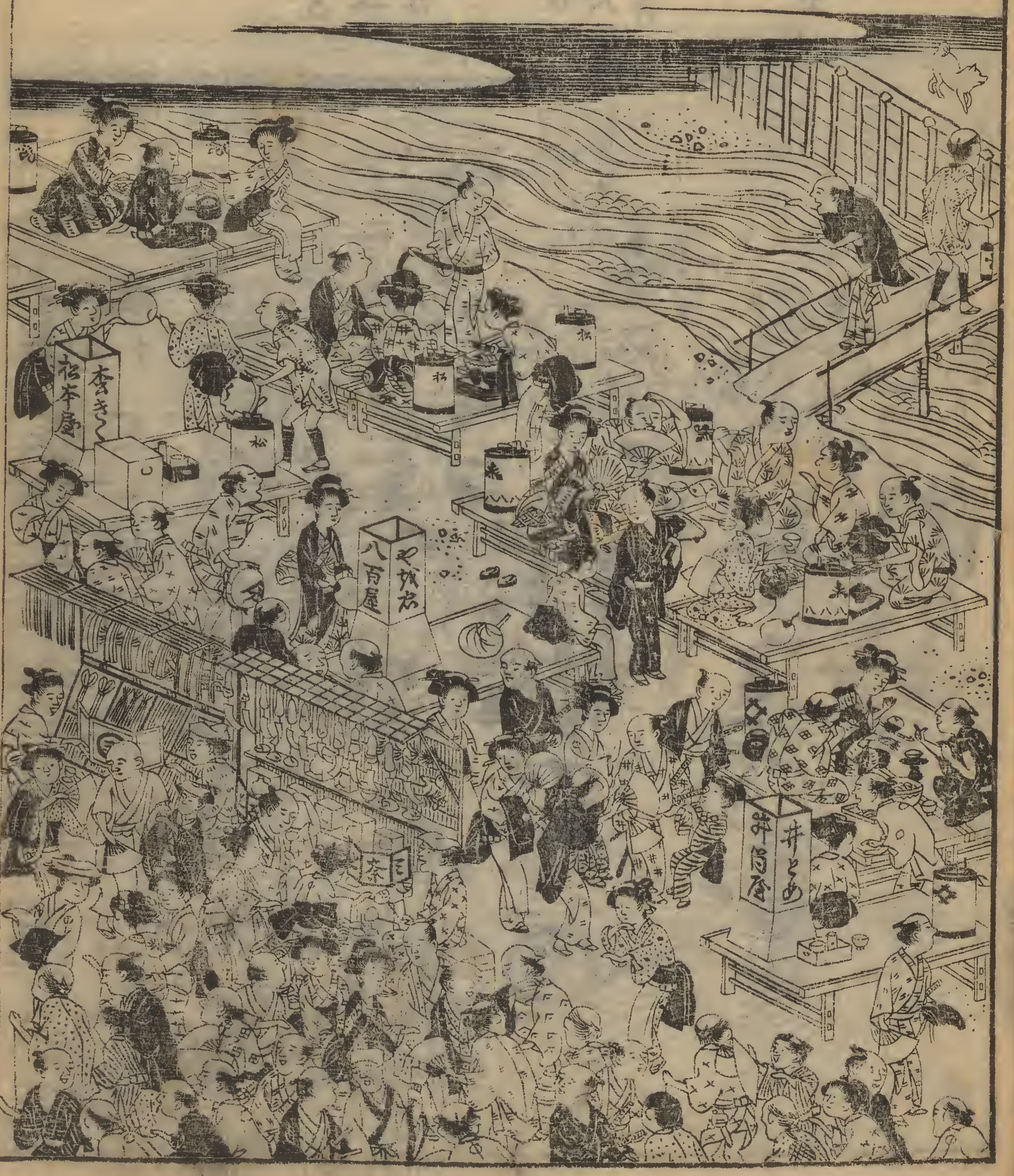
同しく
夕涼夜の都れなしたの邦 浪花 文嬌

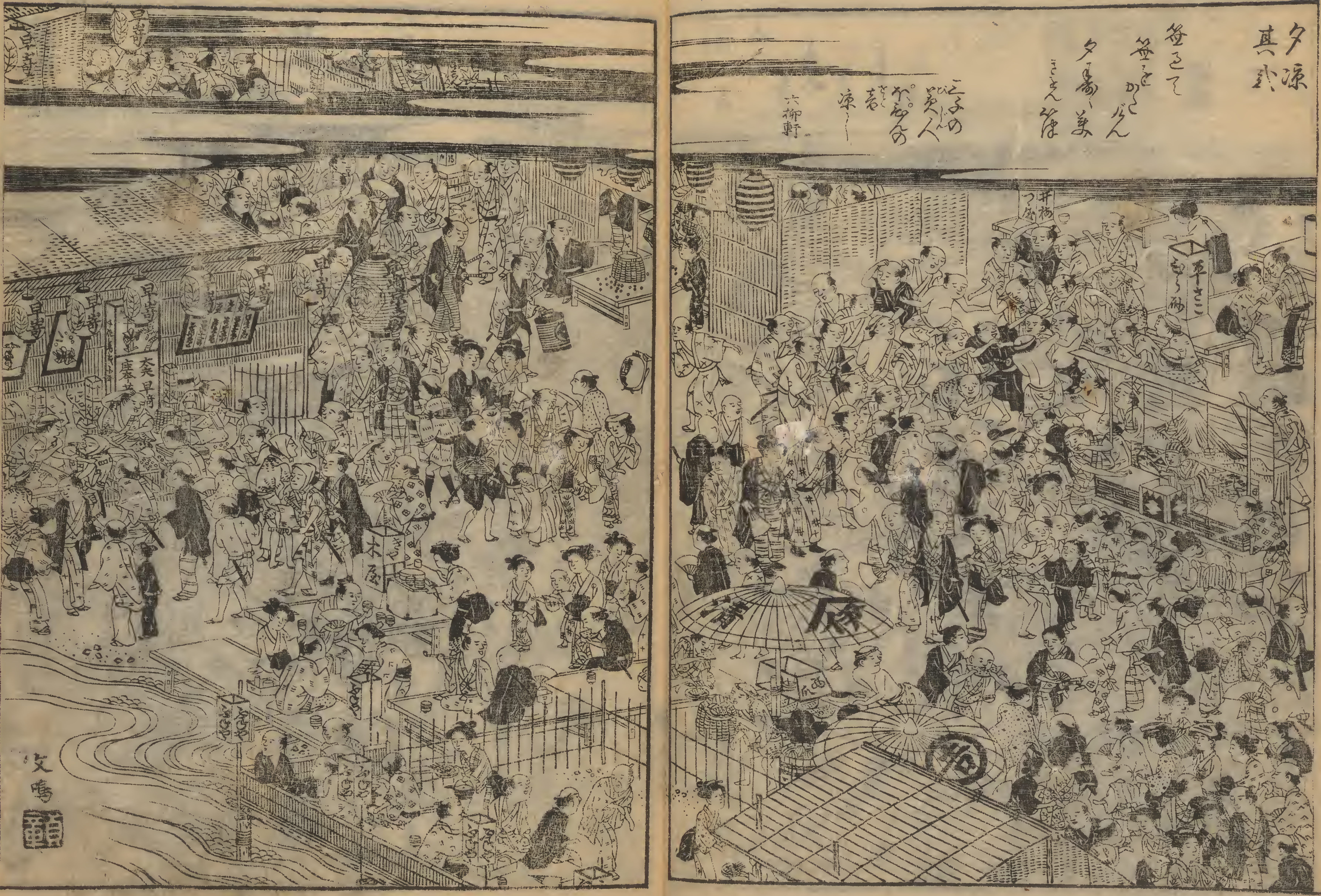
四条河原 夕涼 其一

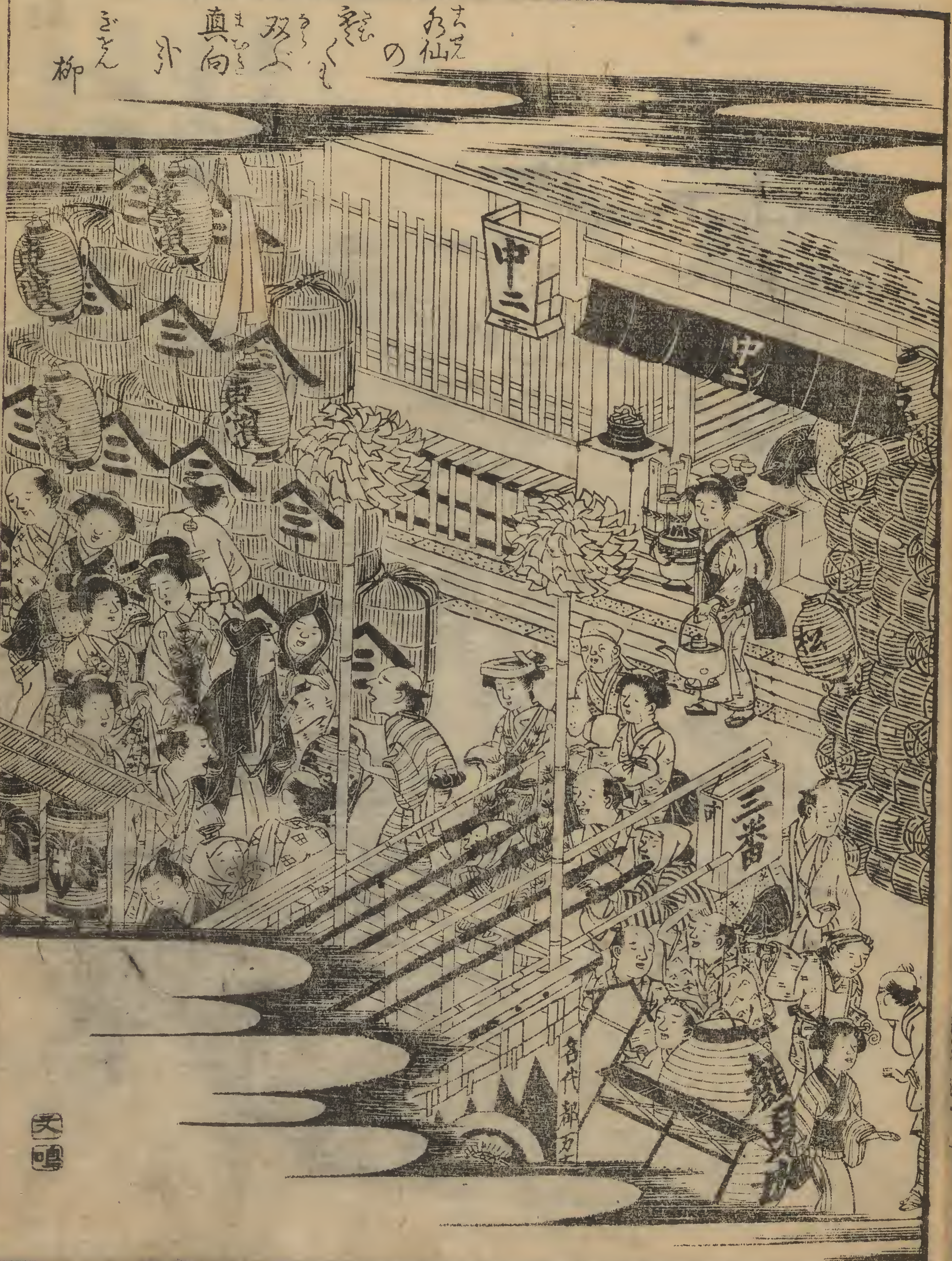
すゞしさや 袖の露ふ 月の影
ぎをん せいみ

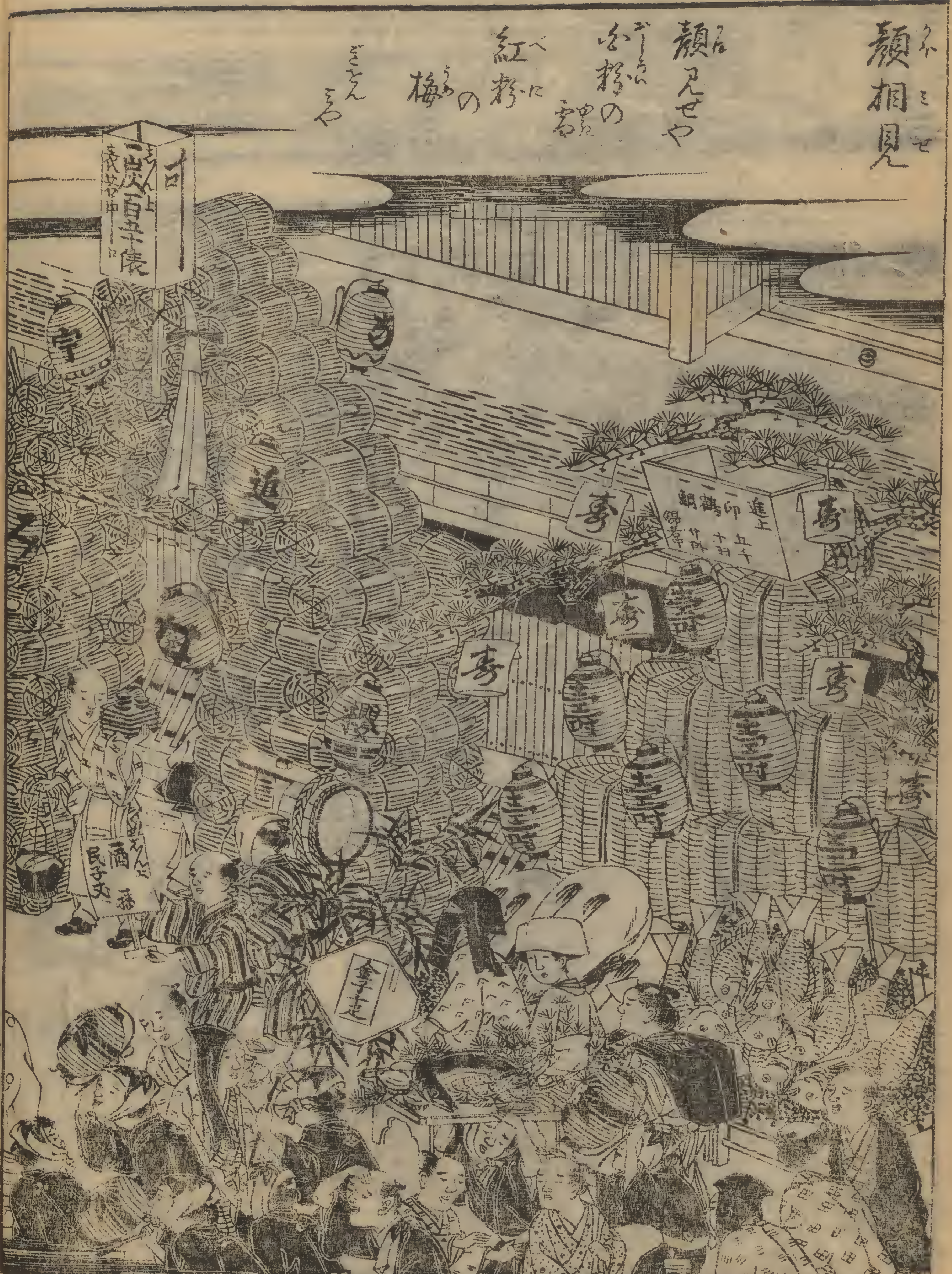
かぼの花 ちりへあり 水のうへ
ぎをん 杵

曇ニ楊弓 星ニ一点 洗ニ金棒 身ニ三更
胴脈




夕涼
其弐
毎己て
毎をかくれん
夕暮の美
きんぼ
こ子の
美人
かぷろの
声
涼し〳〵
六柳軒

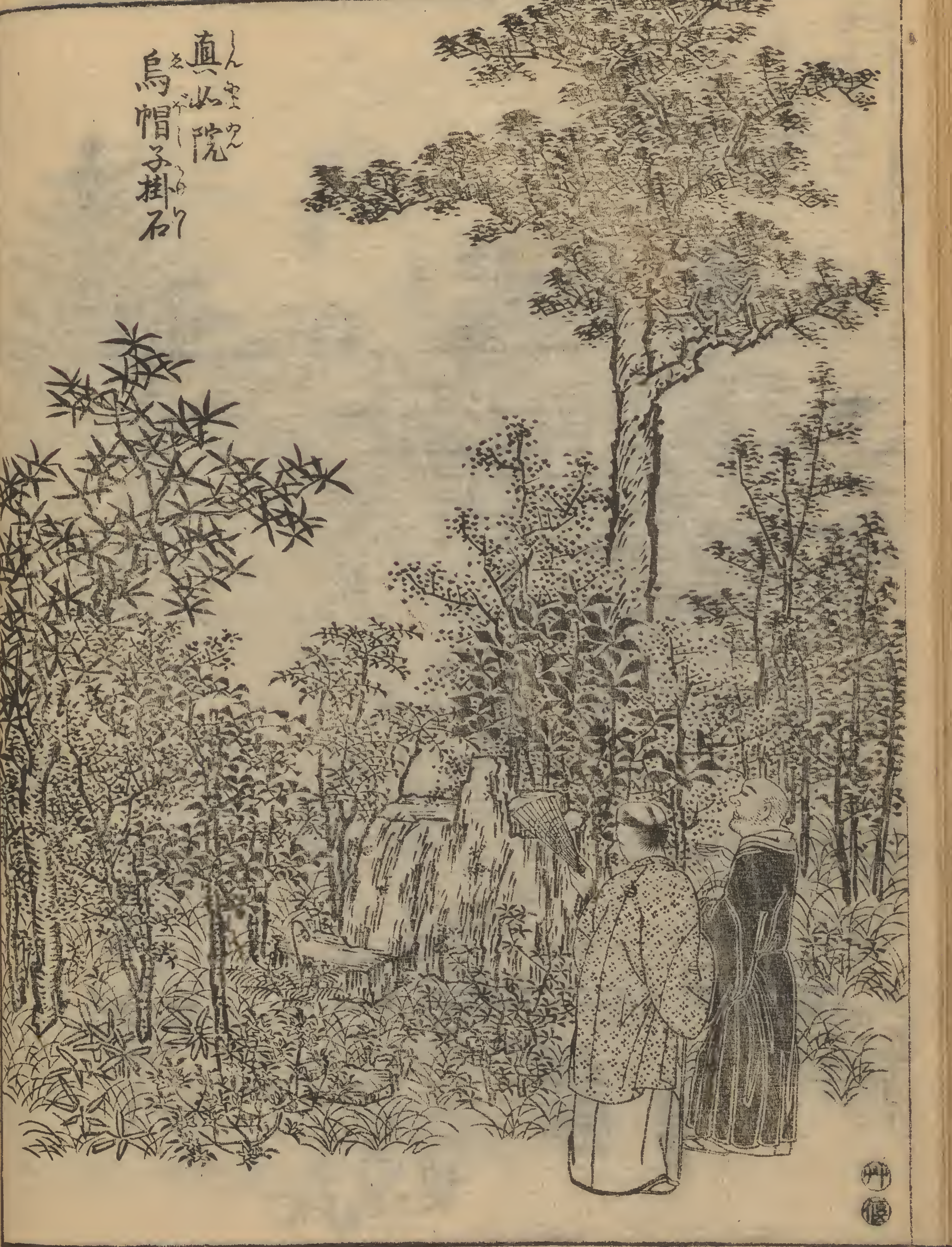

お仙の
ぎをん 柳

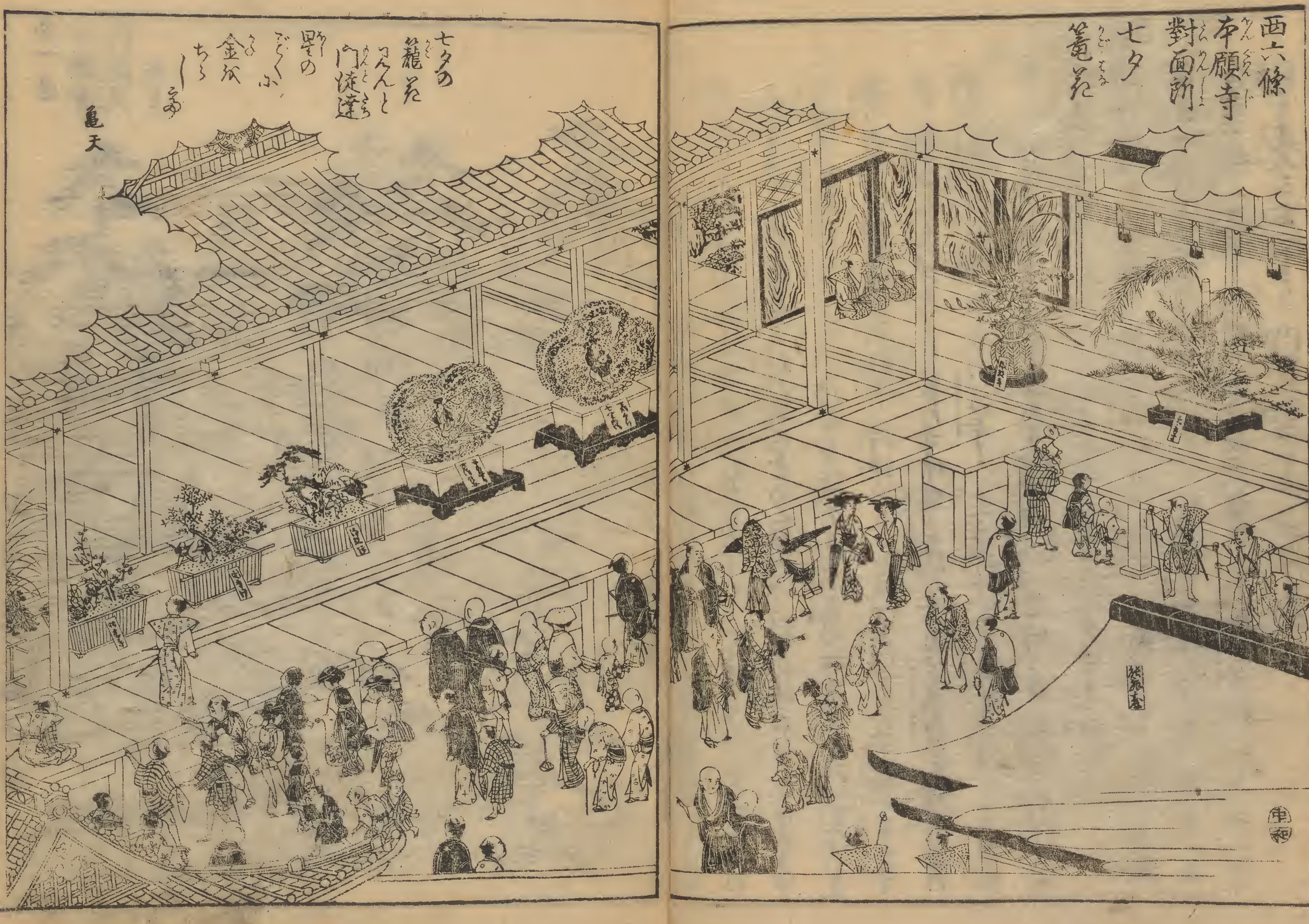

顔見世
顔見せや白粉の中に紅粉の梅
ぎをん こや

本圀寺中
眞如院
瓜實燈籠
眞如水

本国寺ハ足利尊氏公の叔父日静上人住職の時定額寺となる霊宝多くハ立像
釋迦佛宗祖日蓮上人の真蹟髭曼荼羅と称しみな世に名高し其外祖師の
真筆多し徽宗皇帝の御筆の画同筆の三幅對中ハ猫左ハ椿右ハ竿又元宗皇帝
所持の笙耕織の画は屏風ハ狩野古法眼の筆。蝦夷島の二枚屏風ハ岩佐又兵衛の筆。
廊下の半穢ハ加藤清正朝鮮より持帰りしもの寺に寄附す其外名画古筆若干
あり繁多なれバことごとく記さず男児に寺中瑞雲院ハ秀吉公寓居の古蹟又漢世の
後寺産百石を賜ハ救ふ世に百石寺といふ又吉祥院にも秀吉公住しゆへ古跡
あり真如院の庭に瓜實燈籠あり 此れハ足利将軍義昭公の銘く 烏帽子石ハ義昭公烏帽子を
掛置たまひしところ真如水といふ名泉あり又秀竜院の庭中奇境之

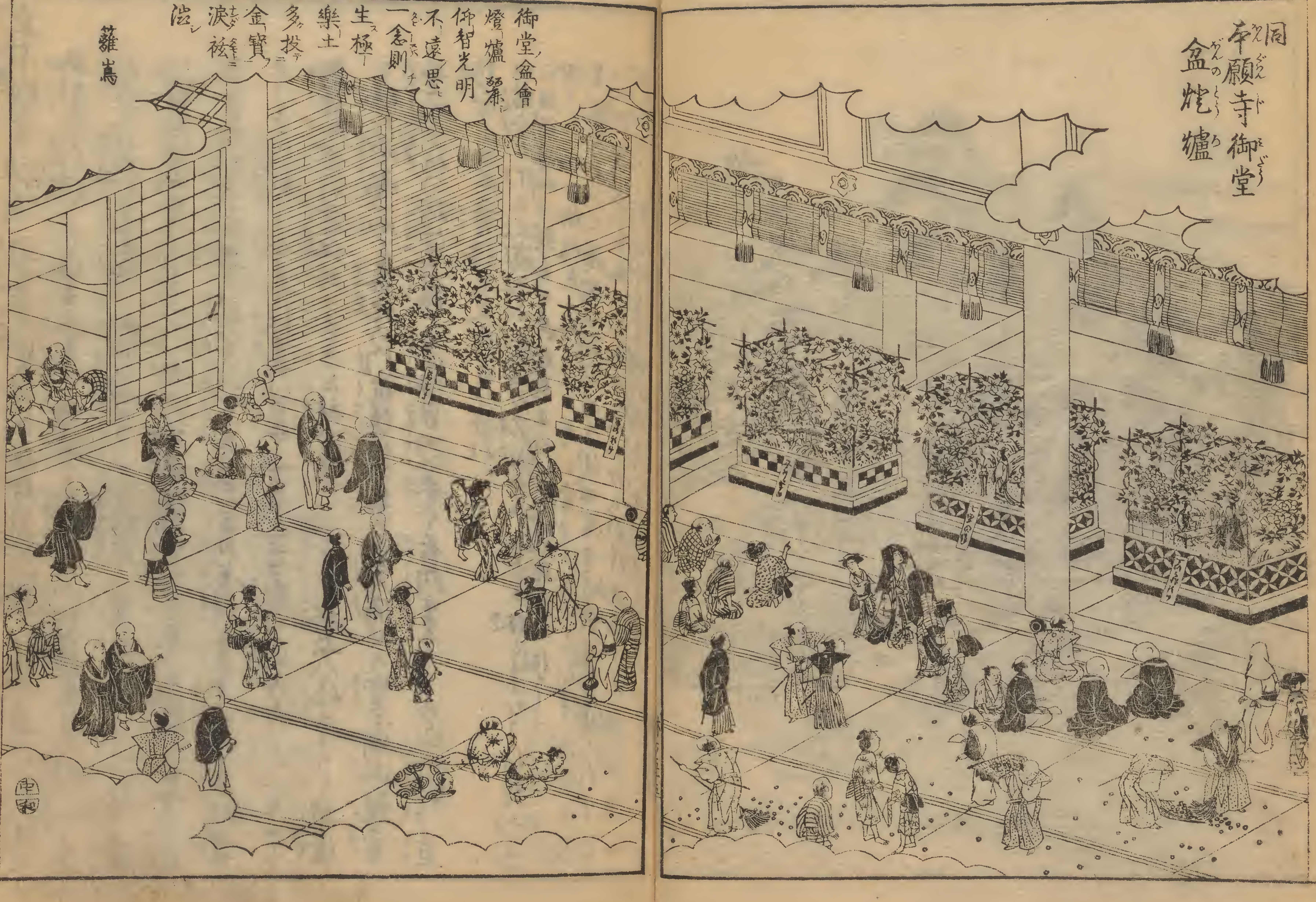
本願寺 西六條 七夕の籠花数多家老候人院外より献上これを對面所
椽側に飾り置く末寺の諸人に観せしむ又中元の日燈籠数箇寄礼式
をはしく候人院外より持ちまゐらせてまんべく門徒の者群集して御堂に
詣と是みな古来より内裏を表せるとぞいへし





西六條本願寺對面所七夕籠花
七夕の籠花のんとと門徒達星のごくふ金がちらし
亀天

西六條本願寺對面所林泉
對面所


同
本願寺御堂
盆燈爐
御堂盆會
燈爐簾
佛智光明
不遠思
一念則
生極
樂土
多投
金寶
涙袪
沾
蘿嶌

東本願寺 東六條 近年天明の火災に罹しより直に尾州侯の御堂を引移して假本堂とし諸國より數多の門徒競來りて釿初より大木大石數百本寄附し粉骨碎身して出精怠らず多の年を累ね本堂阿弥陀堂菊の門南北の門玄関鐘樓鼓樓大寢殿小寢殿白書院黒書院飛雲の間奥の殿舎の數々庫藏臺所茶所に至るまで嚴重壯麗ことごとく成就し今年弥生廿八日本堂開山尊影の遷座卯月二日より阿弥陀堂の遷佛ありこれを拜せんとて関東関西及び諸國よりも波濤を凌ぎ稲麻のごとく參詣の門徒境内の家々に充滿せり實に開山親鸞聖人末代の機法を鑑て道俗男女を安く善所に至らしめん宗風弘通榮ひしき有難も又申すことなれ

此館舎の中に大寢殿小寢殿の名目あり按ずるにむかし此地は三位輔親卿の殿舎の名目あり其林泉に丹後の海天橋立を移して海うく松を樹風景うるはしく月を賞ぜられまし此第叢紙に見えたり寢殿の名目あり後世當寺の殿舎を建られし時此間跡ありて其名をかくなづけられしとぞ輔親卿は歌人なりく紛れも古今集に撰れ和歌入りし人々

袋草紙云
南院ハ海橋立也輔親卿家也為見月寢殿ノ南庇ヲ不差云云
懐圓ガ池水ハアマノ河ニヤカヨフラントヨム此所ニテノ詠也月明夜ニテ切向ヘルニ夜更テ人々モ子ヌラント思テ寢殿ノ南面ニ輔親一人月ヲ見テ居テ于時相樂ニ条輿ニ詠此哥暁更ニ帰ルト云云

東鴻臚館趾 帝王編年記ニ云南小二町起七条坊門ニ迄南七条ニ東西二町起東壬生迄西朱雀 按ずるに東寺建立の後也

續日本後紀云
承和六年八月辛酉以東鴻臚院地二町宛典藥寮為御藥園

大槐秘抄云
七条朱雀東西に鴻臚館とて所は異國の人まゐる時ゐる家なるべしなむありける 村上の御日記に蜜瓜の為を鴻臚にうへさせられ思ひしとぞ見えける
いまは人知らぬ事となりにけるとぞ云

帝王編年記云
延喜八年渤海客來朝於鴻臚館

和漢朗詠
前途程遠馳思於鴈山之暮雲
後會期遙霑纓於鴻臚之暁涙 後江相公

六條内裏 拾芥抄ニ云北ハ六条坊門南ハ六条通西ハ東洞院東ハ高倉あり白河院承保二年新宮を造りて六條内裏と号せられ又六條院ともいふ皇女郁芳門院も住せ給ひし所也皇女薨じ給ひて後寺とし六条御堂と号し弘長年中聖一国師の徒弟湛照六条御堂を革て禅刹となし万寿寺と号す其後万寿寺焼失しぬれば東福寺の塔頭三聖寺の内に遷す

園太暦云

白河院承保二年八月廿日六條新宮棟上也讃岐守顕季造営之

百練抄云

承保二年十二月廿一日遷幸新造六條皇居

中右記云

寛治八年正月二日行幸上皇御所六條殿郁芳門院同御此所

百練抄云

保安四年十一月十日六條院焼亡本郁芳門院御在所今為仙洞

家集

六条院にて人々花入簾と云題を讀せ給ひしに

櫻花たれのまとゐるをおもふらんちりさらぬ今はちるらはそそこ

六条修理大夫

中右記云

天仁元年八月七日郁芳門院御國忌也未刻許参六條御堂

釣殿院 拾芥抄云六条北東洞院東号六条院 光孝天皇御所云付属淳子内親王

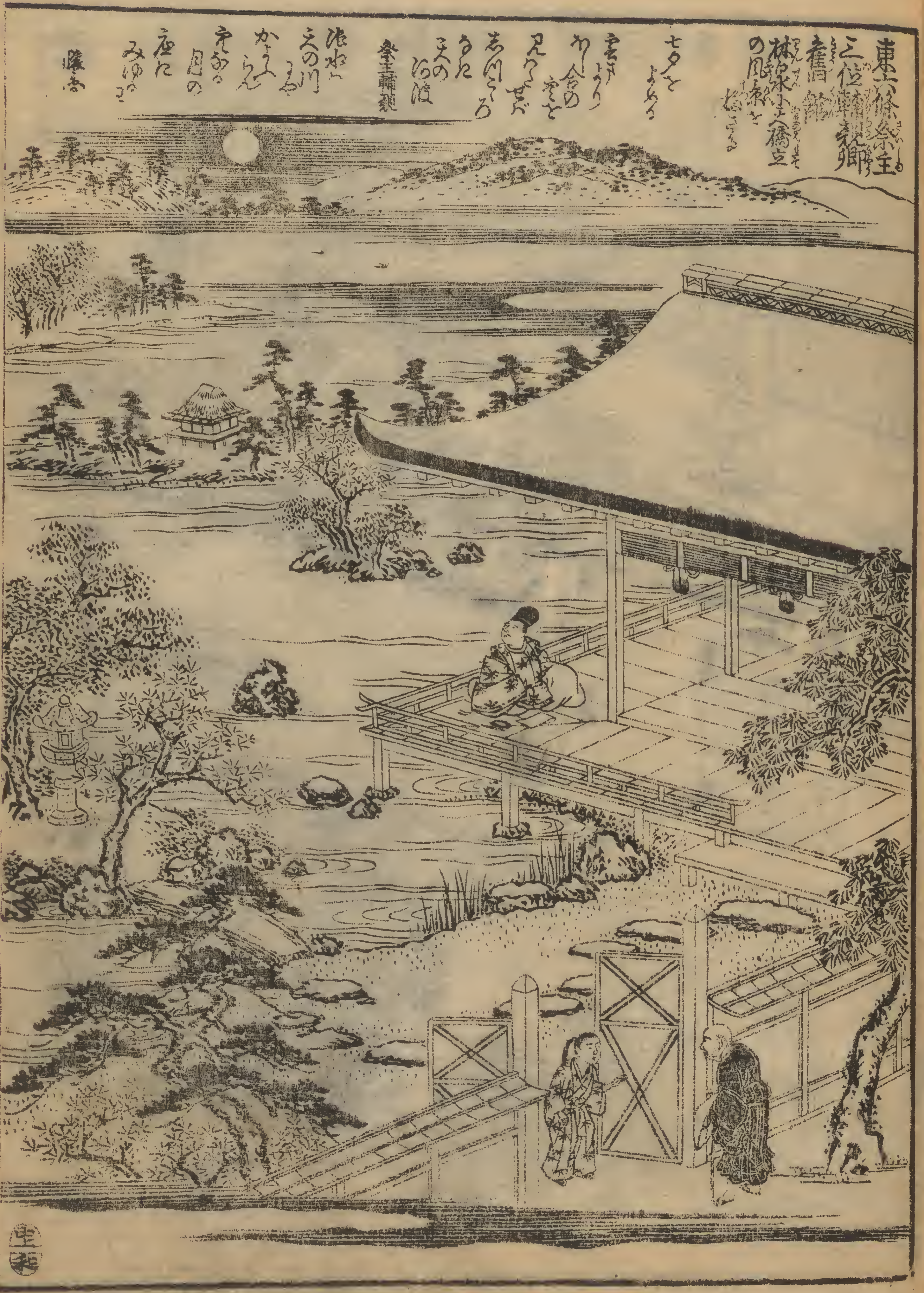
三代實録曰

天長八年生天皇 光孝 於東京六條第 按拾芥抄云光孝天皇降誕所 小松殿云云

簾中抄云

釣殿院今ハ六條院也 藤塩草云源氏五十四帖に六条院ありて今の御寺あるや

河原左大臣の古蹟
のちかころまで
めぐりて
六条祭主
三位
輔親卿
の林泉
天橋立を
うつされ
しところ
今の東
六條
本願寺
御影堂
の
わきより東なる
きこくのばゞ
枳殻の馬場
別荘の地
なりと
いへり


東六條祭主
三位輔親卿
舊館
林泉小天橋立
の風景を
模する
七夕を
よめる
雲井より
行合の
空を
見つゝせば
あはれところ
うた
天の河波
祭主輔親
池水に
天の川なる
かよひらん
宿かる
月の
庭に
みゆるは
藤原

# 桂宮

桂宮ハ六條の北西洞院の
西にありいにしへ天暦の
帝御別殿にして
門前に桂の木あり
震旦より渡りける
僧の長秀ハ原醫師
まくうん有けるに
長秀宮へ参りける時
桂の樹を見渡して
桂心此樹にありけれ
ども人知らずありけ
るを童子來りて
出て其の枝を
切下せといへども
童子ども畏れ
随ひ切下し
ける枝皮を
取て業に遣
ふる唐の桂心
より増りて賢
かりけると云

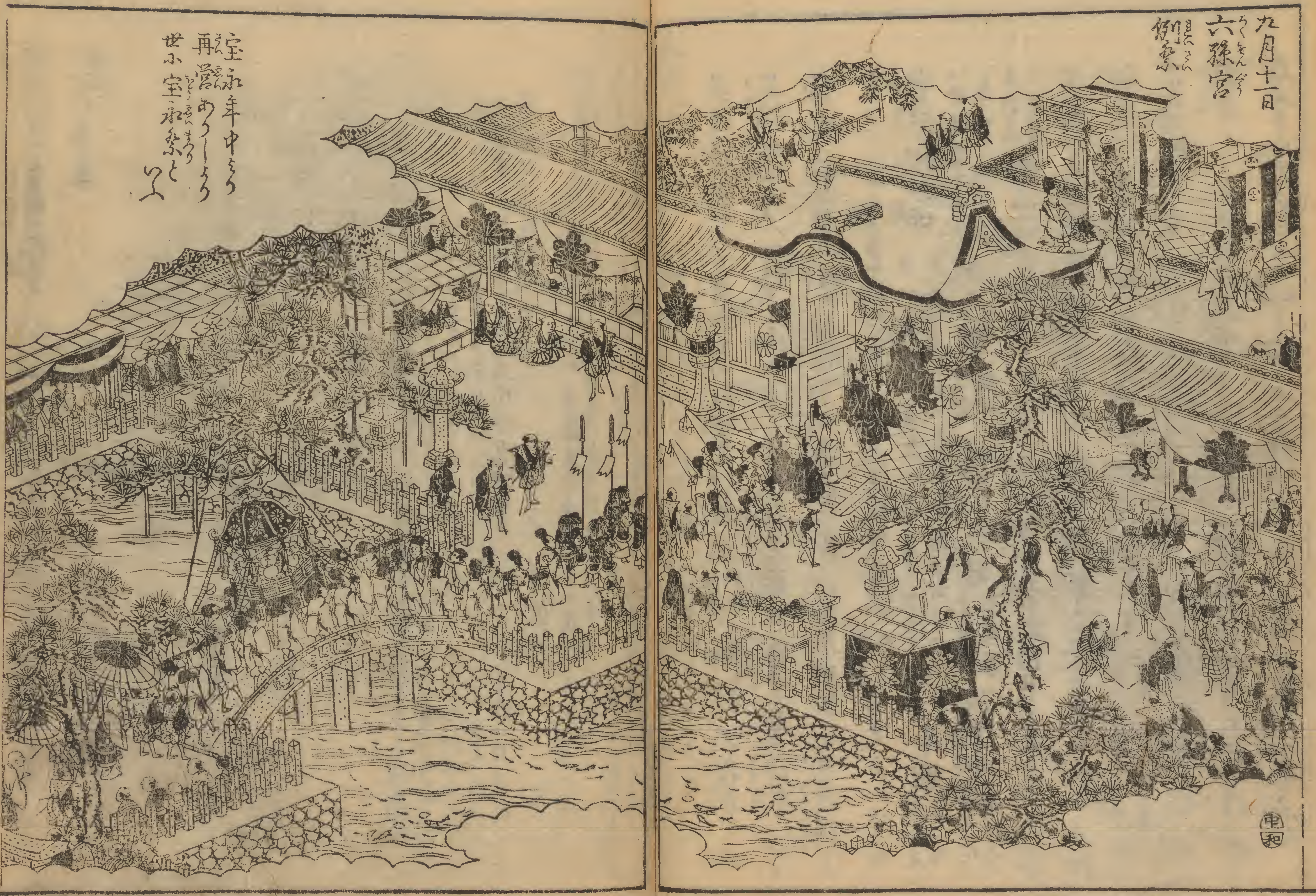
八條 遍照心院方丈 其一

遍照心院 八條坊門にあり 六孫王源経基公を祀る 天徳五年薨逝し給ふ御骨を此所に埋て廟を築て六孫王権現と崇奉る

其後鎌倉右大臣実朝公の後室二位禅尼 法名本覚坊 内府信清公の女 大樓閣と成木幡廻心上人を請し開山として戒律三論真言華厳学の浄刹となる

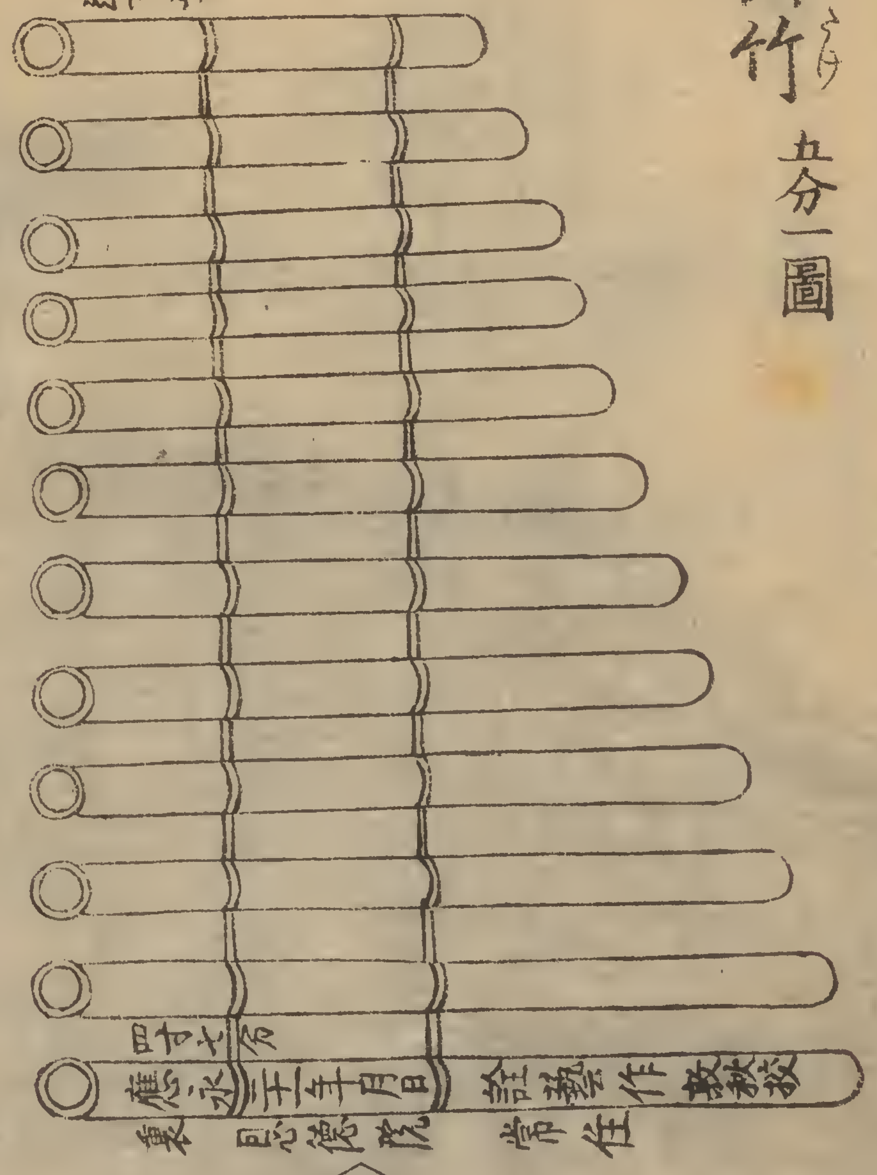
鎌倉二位禅尼 平政子 伊豫国新居庄を寄られ右府将軍の菩提場となし給ふ正堂には阿弥陀并に四天王像を安ず 運慶の作 方丈には中央宝冠釈迦仏 左 源実朝公 承久元年正月廿七日依害 右 開山真空廻心和尚 文和五年七月八日入寂 本願 二品夫人 八條禅尼 文永十一年九月九日逝々 方丈の額 夢窓国師 遍照心院の額 光悦書之 宗真筆 誕生水 方丈の東にあり上に弁財天を祭る 当山年来久しく大に荒廃の体今昔を語るにたへざりしに宝永年中坊中東林院南谷師 将軍家へ願ひて今のごとく厳重に再興に及べり其上例歳九月十一日神事放生供養あり 南谷師は近代の能筆にて世の書する所之勝人伝に悉し

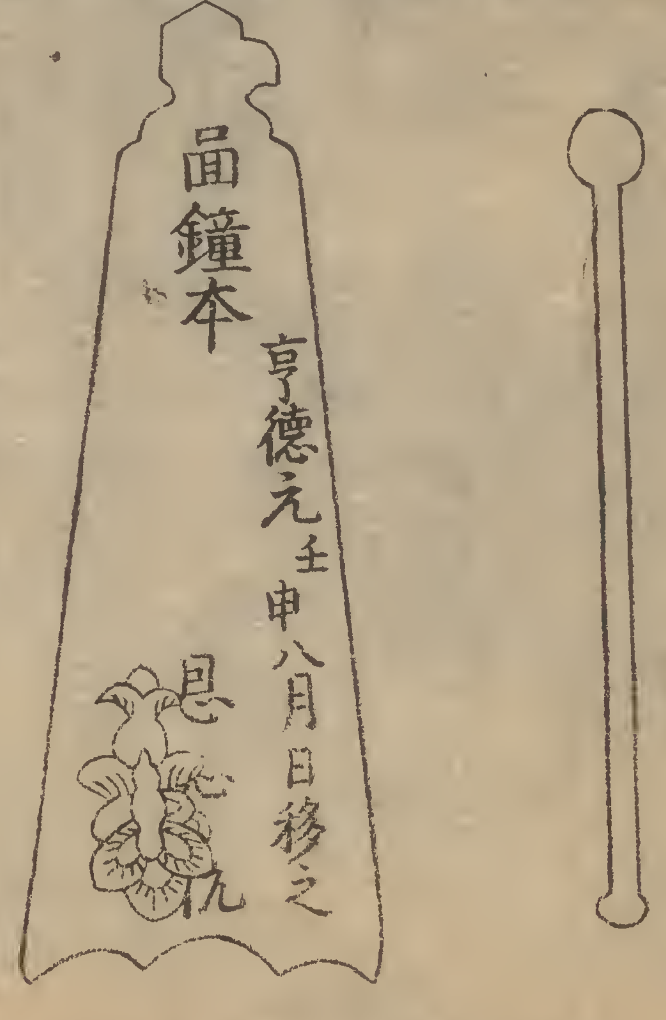
方丈の林泉は廬山を移して諸樹を植て木として遠山の體をあらはし枝を撓て飛泉として白砂を布て流水とし風景真妙なり初めは夢窓国師の作也後世に及んで伏見の朝秀といふ者補作をとりてん京師庭造の一奇品なり


九月十一日
六孫宮御祭
宝永年中より再営ありしより世に宝永祭といふ

遍照心院の重寶数ふあり特に将軍家御寄附の武器多し又呂律の圖竹あり

笛竹 五分一圖






副詠之

年沢十二律者恩徳院詮藝丞樂人敦秋之兩人歴ニ十二箇年ニ應永十九年調畢故号之年沢双調功黄鐘盤渉之二管者年沢之同作詮藝所被調置之也兼又呂調鐘之撰者 後花園帝宇奏之於 禁裏撰金於木金木雖異音律相協故達上聞後有叡感是亦為霊寶自爾以来雖為恩徳院果代交割而今全寄附長老坊者也於皆雖非法會之器唱器唱明梵唄助音之具也以之末代正於衆僧之音藝云我願望茲ニ滿而已

恩徳院

○恩徳院 或京程圖ニ在八條室町ノ東ニ顕隆堂金色堂恩徳院等載ニ千一所一ニ云 或ガ云今遍照心院ノ塔頭有ニ恩徳院一至テ于後世ニ而廷レ之ニ乎

曉筆記云洛陽為洞院恩徳院とやらんいふハ花山院殿の御ちとかや應仁の大乱の内花山院殿の室かくれ給ひしふこれの内はたえし御死骸を見びく恩徳院へうつされしく

其貳
朝霧
澄月

大通寺
東林院
南谷師舊棲

○寶法院（遍照心院塔頭）は林泉広くして東山の風景殊に清く宵の日乃眺望あり特に蓮池ありてみな月の花盛りは香芬々として紅白色を交へ其外爪紅本紅唐蓮などの名葉多しされば文人墨客朝日の出るを待て群参す騒人所によみ詩作りて水芝菡萏を賞する事和漢異なることなし妓女が歌妃子が歩芳気十里に聞え花の君子とも賞し蓮を愛する事予に同じき者は何人ぞやと茂叔もほこれるなる

采蓮曲

采レ蓮ヲ溪上ノ女　祇向ニ花ノ多キ處ニ　花多クシテ人不レ見ヘ　栲亭
花底聞ニ花ノ語ヲ
入レテ花ニ花入レ見　出テ花ニ始テ見レ花ヲ　乃知薄情ノ子　仝
只ハ是宿ニ他家ニ

蓮の香や水をはなるゝ茎二寸　蕪村

蓮に乃香朝日涼しい神の國　蘇甫

○東林院（同塔頭）門外の東にあり林泉広く東南をうけて月に宵に美観たるべし此院は書聖南谷師の住居にして庭中の西に書斎あり

南谷師の一とせをいたみて

一行の雁や端山に月を印す　蕪村

東林院
其弐
南谷師書斎
幻華庵
南谷師の旧棲にゆく

東寺
寶輪院
当院泉水の中に涌泉あり都て小[illegible]滴ちて玉の走るがごとし炎暑の節冷なる事氷のごとく数人汲とも不可尽[illegible]涌泉なるべし

Fences High windows

Seats in summer houses

# 東寺(とうじ)御影供(みえく)

御影供の日
来雀せらう
鳴ゑ於見
つきしく
仙ニ彦
物
とは
見え出
花
葉
のか

山吹
五橋

東寺山吹

岡本氏林泉

朝夕清之介と
いふその郷りしとて
額ハ烏石葛辰の
筆なん

東寺 九條大宮 河海抄云遷都のはじめ東西の大宮に玄蕃寮を置 弘仁以来東鴻臚を東寺として弘法大師に賜ふ東寶記云大師東寺を給て君真言密教の場とし結構の堂舎造立の佛像年中行事僧衆の威儀皆ことごとく唐の青龍寺の風を移し給ふ抑當山は京師の古寺なれども傳来の什物に鴻臚館より以来の書四字半輪ある筆物一千年あまり書代々の太政官符古格の筆跡大師の書等寶庫五箇所に鎖して故に御撰集を許もあらば時に臨て出さるる年もあり京師古刹の頭重寶の長者たるべし坊中寶輪院の林泉あまた泉水の中に沸泉二所あり書院の画は海北友松の筆九老の圖也都て當山坊中に名画名筆多し林泉も亦多くして所々に沸泉の清水ありて樹木を育する事他境に勝ると称せらるる

都林泉名勝圖會巻之壹 終